



第102号
北海道教育大学
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村
(TEL 0126-45-2300)



〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉

- も ○巻頭言…… 1 ○総会報告…… 2 ○平成30年度役員…… 3 ○研究大会…… 4
- く ○先輩を訪ねて…… 5 ○学生活動支援事業…… 5 ○恩師と学生のこの頃…… 6
- じ ○新青陵会員の抱負…… 7 ○支部だより…… 8

持続可能な同窓会をめざして

北海道教育大学青陵会 会長 早瀬 公平



全国でご活躍の会員の皆様に、日頃のご尽力に對しまして心から敬意と感謝を申し上げます。

私は会長を拝命してこの一年間、大学や学生たちと深く関わり、また各支部を訪問して情報や意見交換などに努めてまいりました。

その中で、感じたことは、学生達の活躍に目覚ましいものがあることと、その反面、同窓生とのつながりが希薄であり、その距離が年々離れていくのではないかとという危惧が同居するという、実に複雑な思いを感じてまいりました。

大学の現況は、毎年一八五名程の新入生を迎え、岩見沢キャンパスでは合計七百数十名が、芸術スポーツ学科の四専攻課程(ビジネス、音楽、美術、スポーツ)で学んでいます。全国から選ばれた優れた資質能力を兼ね備えた有能な学生たちで、学生スポーツ界に注目すると、道内では常にトップクラスに座す存在であります。また、美術、音楽の世界でも国内有数の展覧会やコンクール等で入賞するなど、将来を嘱望される芸術家の卵が沢山集うキャンパスとなっております。

これらの様子はHP、Fbでご覧いただけます。

私は同窓会の役割として、(一)母校への支援(二)同窓生との親睦、と整理しました。これまで、当然のごとく教職に身を置く諸先輩によつて会の充実と発展を目指した取り組みが推進されてきましたが、これからはそうはいかないということは否めません。

教育研究や教職研修に努め、組織の力をもつて地域の教育を高めることが大学への恩返しのように考えられてきた同窓意識は、今後大きな転換を迫られることは必然です。

今年の卒業生は、公務員・民間企業等に一八五名中一五一名が就職しました。

就職先は札幌に五十五名と圧倒的に多く、次いで東京を中心に関東二十八名、というように全国、全道に分散しています。ちなみに空知には十名、石狩には0となっております。

これら卒業生のほとんどは、地域経済の発展という枠組みの中に吸い込まれていきます。

教職関係では、三十五名が教員採用試験に挑戦し、十名が採用、(うち

道内七名) 臨探の十八名を含めて合計二十八名が教員となりました。中学高校の音楽体という極めて狭き門ですから、これでも良く頑張っていると言えると思います。ですから、これまでのような教育研究大会の開催はもはや不可能な状況が目前に迫っています。

そこで、私たちは、過日開催されました総会において、青陵会の今後のあり方検討委員会の設置について提案し、承認をいただきました。同窓会の存在と役割について交通手段を考慮し、道央各支部の代表を中心に議論していただきます。これからの事業内容、特に総会や懇親会の方、母校である大学との関係、会費の問題などおよそ二年をめどに持続可能な同窓会へと方向転換の道を探ってまいります。

そして、その先に道青陵創立百周年という大きな節目を迎えることとなります。今までの体制のまま、その節目を迎えるべきか、リノベーションにより新たな価値を見出して、次のステップへふみ出すか、極めて難しい選択に迫られています。これらも含めて検討委員会に議論をお願いしようと考えています。また、一年後には、中間報告をさせていただきます。会員の皆さんから貴重なご意見を拝聴したいと考えておりますので、何卒、よろしくお願い申し上げます。

平成三十年度 北海道教育大学青陵会総会報告

同窓会の変革をめざす一歩に

北海道教育大学青陵会理事長 伊藤 祐輔

今年度の役員改選で理事長を拝命いたしました伊藤祐輔です。退職を前にして一年間のピンチヒッターではありませんが、砂川前理事長の後を引き継いでの大変大きな役職を任せられて身が引き締まる思いです。早瀬会長のご指導の下に短期間ながらも、ご理解とご協力の上、皆様方とともに同窓会としての活動を盛り上げていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

本年度の総会は五月十九日(土)に岩見



沢市ホテルサンプラザで開催されました。年度始めの大変お忙しい中、顧問、役員をはじめとして全道十三地区の支部長、事務局長等が集まり今年度の会の活動についてご協議いただいたところです。

冒頭に、早瀬会長から母校卒業生の就職状況から見られる今後の同窓会の在り方等、その方向性についてお話がありました。特に、同窓会として母校への支援、同窓生との親睦としてきた役割を、今後の同窓会では大きな転換を迫られることを危惧していると訴えられ、組織全体で今後の同窓会の在り方を検討する必要があることを示されました。

これを受けた形で、本総会で今後の同窓会の在り方について検討・協議する組織の設置につきまして全会でご理解をいただき、取組に着手することとなりました。今後の変革への第一歩となることと期待するところであります。

さて、今年度も、前記の今後の同窓会の在り方についての検討をするともに、次

の七つの活動方針を掲げて活動が推進されることになりました。

一、母校の教育活動と教員志望学生への支援活動

母校と教員志望学生への支援の意義を踏まえ、後輩としての教員養成という視点を重視して、大学、道、市町等への働きかけを行います。また、新課程十周年や開学百周年に向けての準備等に努めます。

二、同窓会活動の活性化(組織改善・充実) 各支部との連携を強化し現職教員の研修活動等の支援を行うとともに、教員以外の会員の把握に努め支援を行います。



三、母校との連携

学生生活活動支援基金による学生の活動への支援や「教授教養講座」への支援により教

員をめざす学生の支援の充実に努めます。

四、財政の確立と会員の確保

会員数の減少など財政が厳しくなっております。各取組の見直しを図るとともに、会費納入率の向上や新会員発掘など財政基盤の確立に努めます。また、進路が多岐にわたる卒業生の掌握に努め、本会への入会取組を進めます。

五、研究の充実のための活動

北海道教育大学青陵会研究大会の開催を通して、若手教員の資質向上に努めます。また各支部等の研究大会等を支援します。

六、広報活動の充実

広報・短信の発行による同窓会活動の広報に努めるとともに、ホームページのリニューアルによる充実に努め、より広く広報活動を展開します。



七、教育行政への積極的な参加

現在、本庁をはじめとした各教育局、各市町村教育委員会への登用、出向等により、連携を深め同窓会活動への理解とご支援を賜っております。引き続き教育行政への人材の輩出をめざした取組を進めます。各支部等におかれましては、会の活性化



に向けて様々な取組が進められていると思えます。早瀬会長のもと、「親睦と資質の向上」の会是の実現にむけて、それぞれの支部と連携を深めながら、会全体の業務の推進に邁進していきますので、ご支援よろしく願います。

平成30年度 北海道教育大学青陵会 支部長・事務局長一覧

公費・民間	社教主事	指導主事	高特大	関東	オホーツク	根室	釧路	十勝・帯広	日高	胆振	空知	渡島	檜山	留萌	宗谷	上川	小樽	後志	石狩	札幌	支部名	支部長	事務局長
松浦靖高	川森功偉	菅原巧真	黒田治	岡山武	金子徳郎	滝泰英	志藤英樹	大熊孝史	中村等	三浦敏	高田宏昭	浅野友善	草間留美子	金山茂樹	小島康秀	鈴木伸行	山本博之	巻敏弘	加藤理恵	藤島健志	支部名	支部長	事務局長
佐藤直輝	川森功偉	眞田眞	宮崎純也	御法川慎司	清水洋人	滝泰英	志藤英樹	早川一之	玉手広昭	大年智二	畠山和彦	浅野友善	草間留美子	豊崎東洋	内藤修司	倉本格克	宮澤知	渡邊均	菅原聡	磯島年成			

平成30年度 北海道教育大学青陵会役員

- 名誉顧問 葛西 明
- 顧問 笠井 瑞昭
- 顧問 藤原 光成
- 顧問 今井 信義
- 顧問 大盛 啓司
- 顧問 安孫子章平
- 顧問 根津 孝
- 顧問 佐藤 惠三
- 顧問 荒川 巖 高島 康範
- 顧問 高木 勇一 東志 昇
- 顧問 長谷川和之
- 顧問 早瀬 公平
- 顧問 石塚 信彦
- 顧問 綱淵 秀幸
- 顧問 近田 勝信
- 顧問 高田 宏昭(空知)
- 顧問 志鎌 正敏(札幌)
- 顧問 福田 幸一(石狩)
- 顧問 巻 敏弘(一区)
- 顧問 本間 正彦(二区)
- 顧問 浅野 友善(三区)
- 顧問 佐竹 秀行(四区)
- 顧問 小田 良秀(五区)
- 顧問 黒田 治(高特大)
- 顧問 石原 学(指導・社教)
- 顧問 伊藤 祐輔(由・由仁小)
- 副理事長 米本 智(ゆうばり小)
- 副理事長 八柳 圭(北長沼小)
- 会 計 納口 卓(栗・栗山中)
- 庶務部長 織田 靖雄(歌志内小)
- 副部長 米倉 卓司(沼・沼田中)
- 副部長 林 宏和(岩・北村小)
- 副部長 曾根 秀彰(美流渡中)
- 研修部長 井村 信(上砂川中)
- 副部長 小熊 孝一(妹背牛中)
- 副部長 小笠原寛和(岩・第二小)
- 副部長 渡邊 現(赤・赤間小)
- 副部長 山下 正志(美・峰延小)
- 副部長 田中 豊人(長沼中央小)
- 副部長 的場 孝仁(砂・中央小)
- 副部長 後藤 敦志(浦臼中)
- 副部長 松田 一直(美・茶小)
- 副部長 江幡 佳代(三・岡山小)
- 副部長 一ノ瀬健太郎(赤・中央中)
- 副部長 小野寺英樹(美・峰延小)
- 副部長 沢 泰宏(岩・第一小)
- 副部長 高羅 正次(滝・東小)
- 副部長 疋田 博和(沼・沼田小)
- 副部長 堀 文彦(栗・角田小)
- 副部長 尾見 秀樹(岩・光陵中)
- 監 査 石山 慎人(一区)
- 監 査 中村 等(四区)
- 監 査 吉田 幸雄(空知)

平成三十年度
第四十五回

北海道教育大学青陵会研究大会
岩見沢市生涯学習センター「いわなび」

「親睦と資質の向上」

八月十一日（土） 岩見沢市生涯学習セン

ター「いわなび」において、第四十五回北海道教育大学「青陵会研究大会」が盛大に行われました。

今年度は、白老町教育委員会教育長安藤尚志氏を講師としてお招きし、「民族共生象徴空間を活用した事業展開」という演題でご講演いただきました。



「民族共生象徴空間を活用した事業展開」

安藤 尚志氏

アイヌ文化復興のナショナルセンターである国立施設、民族共生象徴空間が白老町に開設される。

その一つである「国立アイヌ民族博物館」は、ポロト湖を一望できる展望デッキや、アイヌ文化に関する様々な資料が並ぶ展示室、来場者の憩いの場となるカフェなどを含めた、大型の学習施設となる予定である。

また、博物館を含めた広大な敷地を「国立民族共生公園」とし、体験交流ホールや学習館、工房などを配置して、アイヌ文化の伝達や継承を目的として、多くの来場者を期待しているところである。

今、アイヌの人たちの歴史や文化を学ぶ意義は大きい。

北海道命名一五〇年の歴史以前から、アイヌの人たちは自然との共生を継続してきた。

また、一七九市町村名の約八割はアイヌ語が由来であり、私たちの生活の中にもアイヌ文化が深く浸透している。

そんな歴史の陰には、同化政策や差別の問題が存在した。白老でも過去には、和人とアイヌの子どもたちがそれぞれ違う学校で学ぶ時代さえあった。平成になり、先住民族に対する文化の振興や伝承に関する法律が次々とでき、共生の意識が益々高まっている。

アイヌの人たちの知恵は、常に人や自然との関わり基本としている。アイヌ語の挨拶に使われる「イランカラプテ」という言葉には、「あなたの心にそっと触れさせていただきます」という意味がある。互いに助け合う精神や自然との共生を目指した循環型の生活など、アイヌの文化から、今の私たちが忘れてきている基本の考え方を学ぶことが出来る。白老町ではこの十年、小中学校においてアイヌの文化を教育課程に位置づけ、体験学習などを通してその考え方を子どもたちに伝えている。

教育行政として、今後につなげるための

プランが、今求められている。民族共生象徴空間の施設・環境を、子どもたちの学び、そして町民や来場者すべての学びにどうかすかをテーマとして、今後の活用プランとして推進していきたいと考える。

新しい国立施設には百万人の来場者が予想される。多くの外国人来場者も見込まれ、これを機に小中の英語教育の推進につなげていく。また、高齢化率の高さを逆に利用した町民によるボランティアガイドの育成を通し、町民と共に生涯学習の充実を図りたい。

アイヌに対する環境は変化しており、そこには教育の力が間違いなく存在する。子どもたちの「考える力」をこれからも信じ、継続して教育に力を注ぎたいと考える。

【教育懇談会にて】

その後の教育懇談会にも多くの同窓生が参加し、大いに盛り上がりつつありました。中でも音楽科コースの学生三名が初めて参加し、トランペット・ホルンによる生演奏を披露してくれました。

十八畳一間の希望寮で大学生活をスタート。ピートルズに興ずる社会の先輩と共演

倫理の先輩とバンドを組んでダンスホールで演奏、生活費を稼ぎました。その後一年で退寮して間借り。要因は、判定試験を受けて数学から音楽研究室に移ったことやクラシックの神髄を教わった先輩神光志郎氏との出会い、岩見沢混声合唱団員だったことでした。さらに

大学三年目に私の人生を決める出来事が起こりました。当時、札幌交響楽団学生定期会

員でしたが、定期終了後に札幌団員のレコードプレゼント抽選会があり、十五名中の一

番最後に神先輩が当選、レコードはA&Mの試聴版でした。

「Burt Bacharach Reachout」と題されたそのレコードを聞くや否やすぐに視聴を止めた先輩が、隣部屋の私に「このレコード、クラシックじゃないのであげるよ」と譲ってくれたのです。いただいたそのレコードに針を下ろした「瞬間(とき)」や部屋の臭い、空気、温度、窓から見える風景たちが今でもタイムマシンのように蘇ってきます。

世界にこんな凄い音楽があるのかと雷に

打たれた感じでした。それからはひたすら「Burt Bacharach」と歩む人生です。その後、先輩も私に感化されていったことは言うまでもありません。先輩は今、日高で「町おこしクラシックレコード鑑賞会」を立ち上げ、町からの強力な支援のもとクラシック音楽の振興に大きく寄与されています。

私は、池上、大塚、荒又、野村、長内各先生方に音楽のご指導を受け、卒業後も長内先生をはじめ水田先生や阿部先生など、多くの音楽の先生方のご指導を頂いています。娘が東京藝大ピアノ科・熊川バレエ、息子が桐朋学園・NHK交響楽団にいることもあり、退職後は東京へ移住し「ミノリン音楽事務所」を立ち上げました。特に、歌志内小学校、南幌小学校、由仁中学校の校歌を作曲させて頂いたことは一生の宝物です。教頭時代に

大腸癌で死にかけて命の逆算を知った残りの人生を、「青陵会関東支部」にお世話になりながら、多くの方々とともに音楽道を歩むことが出来れば、せめてもの恩返しかな、と自分勝手に思っています。ありがとうございます。

先輩を訪ねて 母校ともに歩む～先輩・先生を訪ねて～

北海道教育大学岩見沢校 音楽研究室
青陵会関東支部事務局長

御法川 慎 司 氏
(昭和47年卒)



私には、池上、大塚、荒又、野村、長内各先生方に音楽のご指導を受け、卒業後も長内先生をはじめ水田先生や阿部先生など、多くの音楽の先生方のご指導を頂いています。娘が東京藝大ピアノ科・熊川バレエ、息子が桐朋学園・NHK交響楽団にいることもあり、退職後は東京へ移住し「ミノリン音楽事務所」を立ち上げました。特に、歌志内小学校、南幌小学校、由仁中学校の校歌を作曲させて頂いたことは一生の宝物です。教頭時代に

大腸癌で死にかけて命の逆算を知った残りの人生を、「青陵会関東支部」にお世話になりながら、多くの方々とともに音楽道を歩むことが出来れば、せめてもの恩返しかな、と自分勝手に思っています。ありがとうございます。

学生活動支援事業 大学連携部長 高羅 正次

北海道青陵会の活動の大きな柱の一つとして、大学連携部では、平成二十二年度より、母校の発展と学生の活動充実のための支援事業を行っています。平成二十



六年度から、「芸術・スポーツ文化科」になつた母校が『北の芸スポ大学』と呼ばれるにふさわしい、創意と工夫に満ちた学生の活動を支援すべく、今年度も七月十七日に学生活動支援金贈呈式を行いました。今年度の各専攻の主な活動内容をお知らせします。

- 〈芸術・スポーツビジネス専攻〉
- 「みんなで文化的なキャンパスを作ろう」
- ・ 学生ホールやシアタールーム、図書館といった場所でプロジェクトを行い、いつもと違ったキャンパスライフを提供します。
- 「言葉にならないもの展」
- ・ 言葉にならないものはある？というブログを出発点とした作品を募集、展示、公演します。

〈スポーツ文化専攻〉

○ 「ふくしまキッズ」

・ 福島の子供たちへの支援事業を進めます。岩見沢「ぼる」と札幌市の滝野自然学園を拠点にアウトドアチャレンジや手稲山登山、自炊等を通して子供たちが成長する場を作っていきたいと考えています。

〈美術文化専攻〉

○ 「修了・卒業制作展」

・ 美術文化専攻の修了生及び卒業生による、学びの集大成を発表する展覧会を開催します。多くのお客様にご来場いただけますように広報活動にも力を入れていきます。

〈音楽文化専攻〉

○ 「定期演奏会」

・ 音楽文化専攻の学生・教授陣が全員で一丸となり、四月から準備を始め、定期演奏会を開催します。企画運営全て学生が中心で行います。専攻内の全学生から演奏曲目候補を集め、アンケートをとり選曲した曲を演奏します。



若いアイデアと創意工夫で学生の活動をより充実させてもらうためにも、支援体制をしっかりと整えていきます。



「美術の楽しさ
大切さを学ぶ」

美術文化専攻 教授
阿部 宏行

前田奈美さんは、芸術文化コースの美術

教育研究室に所属し、友人や後輩にも誰か
らも慕われる笑顔の素敵な学生でした。芸
術文化コースは、平成十八年に岩見沢校に
開設され音楽や美術、そして、身体芸術な
どを学ぶ個性あふれる学生が在籍していま
した。（現在、美術文化専攻に美術教育研
究室があります。）

美術教育の実習の授業では、幼稚園で子
どもたちの遊びの輪の中に入り、指導のあ
り方を学んだり、実技の授業も積極的に受
講したりしていました。タイ舞踊などの民
族芸術にも熱心に取り組んでいました。

卒業研究では、美術嫌いになる要因を調
べ分析するとともに、表現の幅を広げる
「コラーージュ」の技法が効果的であること
を発表しました。

コラーージュというのは、糊で貼り付ける
という意味があり、画面に相応関係のない
素材を結び付け、そこに現れる面白さを発
見し、自分の思いを表現する技法です。絵

本作家のエリック・カールの「はらべこあ
おむし」や、レオ・レオニの作品などが、
事例に挙げられます。

このコラーージュに関して、三歳児から五

歳児までの幼児の造形的な発達を観察する
ため、本校で行っている地域貢献事業の
「マルシユレ（造形あそび学校）」で
実証研究を行いました。また、美術嫌
いのターニングポイントとなる中学生
に対しても、授業参観やアンケート分析
などを行い、机上の空論にならないよう、
実践的で実証可能な研究を積極的に行
いました。

卒業を経て難関の教員採用試験を初
年度に合格し、現在、留萌地区の中学
校に美術教師として勤務し活躍してい
ます。中学校で現実と向かい合いなが
らも、授業を通して美術の楽しさや大
切さを教えています。教え子の誰からも
尊敬される先生と聞いています。

これも同窓の先生方の支援や協力があつ
てのことと推察しています。これからの北
海道の美術教育をリードするキーパーソン
となることを大いに期待しています。

このコラーージュに関するキーパーソン
となることを大いに期待しています。

恩師と学生のこの頃



「恩師の姿から」

留萌市立港南中学校
前田 奈美

大学を卒業して三年が経ちました。慣れ

親しんだ土地を離れ、新しい土地で教員を
始め、三年目を迎えます。今年度は、二年生の
担任をもたせていただき二十四名の生
徒とともにスタートしました。昨年度
からの持ち上がりで慣れ親しんだメン
バーですが、慌ただしく過ぎる毎日、
一学期があつという間に過ぎました。

さて、私が岩見沢校に入ろうと思っ
た理由は、教員になりたいということ、
そして、自分が好きな美術を学んでい
きたいと考えていたからです。研究室
も美術教育研究室と決め、入学しまし
た。そこで、恩師である阿部先生と出
会いました。美術教育研究室は、子ど
もたちの学びを自分でも実際に体験しな
がら学ぶことができる研究室です。同学年
は私一人ということもあり、阿部先生には
日々の講義を始め、論文制作に至るまで大
変お世話になりました。阿部先生にはいつ
も優しい言葉をかけていただき、励まして

いただいたことを鮮明に覚えています。ど
んな時も優しく支えてくださった暖かみは
今でも忘れません。私もそのような「先生」
を目指し日々、研鑽を積んでいます。教員
として生徒と向き合う中で、時には怒りの
感情が表に出てしまいそうなきもありま
す。そんな時、阿部先生の優しい言葉と表
情を思い浮かべると、「怒る」のではなく、
どのようにしたら子どもの心に響くのかを
考えながら「叱る」に変え、生徒と接する
ことができます。大学時代、阿部先生の姿
からたくさんのことを学び、今の教員生活
の中で活かされています。

現在も、研究などで時折阿部先生とお会
いする機会があります。学生時代と変わらず、
優しい言葉をかけていただいています。その
言葉に伝えられるよう、教員として胸を張つ
て少しでも成長した姿を見せられるよう、
これからも精進して参りたいと思います。

最後になりましたが、ご指導いただいた
阿部先生をはじめとした先生方、同じ授業
で学び励ましあつた学友のみなさまには、
本当に感謝しております。ありがとうございます。

ありがとうございました。

新青陵会員の抱負



「岩見沢校での四年
間で学んだこと」
北海道コカコーラボトリング(株)
三戸 優衣

北海道教育大学岩見沢校を卒業し、平成三十年四月から北海道コカ・コーラボトリング株式会社に就職しました。二か月間の研修を経て、六月から帯広事業所で営業職として勤務しています。

四年前、私は芸術・スポーツビジネス専攻の一期生として、岩見沢校に入学しました。ビジネス専攻は新設のため、すべての授業が前例のないゼロからのスタートでした。同期や先生方と試行錯誤を重ねながら、受講生でありながら授業を創り上げていくという経験は、一筋縄ではいかないことばかりでしたが、とても貴重なものでした。

経歴や興味の対象が全く異なる同期が多かったため、授業では自分には全くない視点や発想が飛び交い、毎回刺激を受けていました。

ビジネス専攻の授業はフィールドワークが多く、学外の方に協力していただく機会が多々ありました。自分たちのやりたいことに賛同してもらうためには、相手にメリッとや魅力を理解してもらう必要があります、企

画という形のないものを売り込む難しさとやりがいを学びました。ビジネス専攻での授業の経験が、現在の営業職への興味に繋がったと感じています。

また、在学中は男子バスケットボール部のマネージャーも務めていました。入部当初、自分に任せられる仕事は全く無い中で、チームのために何ができるか、自分にしかできないことは何か、必死に考え、実行、失敗を繰り返しました。チームの先輩、後輩、同期、そして先生には、私が提案したことをいつも尊重していただき、とても恵まれた環境で四年間活動することができました。より良い成果を出すために、自分で仕事を見つめる、創り出すという経験は、社会人として働き始めた今、私の支えとなっています。

六月から配属となって約二か月、毎日新しいことばかりで日々圧倒されており、「自分ができるだろうか」という不安を感じながら勤務しています。まだまだ覚えなければいけないことばかりですが、岩見沢校で学んだこと、経験したことを忘れずに、卒業生として恥じない社会人になりたいです。

仕事を通して社会に貢献することが、四年間学んだ岩見沢校への恩返しになると信じて、これからも精進していきます。



「北海道での経験を糧に必ず大舞台で」
西武ライオンズ
齊藤 誠人

こんにちは、齊藤誠人です。皆さまに暖かく見送られ、北海道から埼玉県所沢市に来て、早七か月が経ちました。毎日、強い日差しの下で泥だらけになりながらも、一軍で活躍する日を夢見て懸命に頑張っています。

僕の支えはやはり、地元・北海道の仲間が存在や思い出です。ファームまで応援に駆けつけてくれる大学時代のチームメイトや彼らと過ごした日々が今の自分を作ってくれていると思っています。北海道教育大

野球部は、監督、コーチがいない「部員だけ」の部活。練習メニューや遠征先は全てチームメイトで決めていました。印象深いのは三年生の時に行った岡山遠征。手分けをして、飛行機や宿を予約したり…。練習試合の対戦相手も自分たちで探しました。「自分たちで考えて動く環境」は自分を成長させてくれたと思います。

そして野球部と同様に思い出深いのが、誰でも楽しむことができるように形を変えた「アダプテッド・スポーツ」に関わる活

動を全道各地でしたことです。大学二年の後期を迎えたくらいに友人と『ひとつ新しいことに挑戦しよう！』と意気投合して、活動を始めました。運動が苦手な人をはじめ、どんな人でもスポーツを好きになってもらいたい、という気持ちが強かったからです。大学のゼミでこの活動をしましたが、「スポーツを皆とやる喜び」を感じましたね。また、知的障害を持つ方のティーボールチームを指導させていただくこともありました。参加していただいた皆さまからは、僕のプ

ロ入りが決まった時に、寄せ書きをいただくなど、パワーの源になっています。今、壁とぶつかることもありますが、四月中旬に初めてファームの試合でスタメン出場のチャンスももらいました。ヒットが出ずに悩んでいた時期でしたが、第一打席、真っ直ぐを捉えた打球が右翼フェンスを越えて初ホームランになりました。大学時代は全く描いていなかったプロ野球選手という職業でホームランを打つことができました。人生は何が起るか分からないと思いましたが、上手くいかないこともあります。大学時代の様に「今いる場所」で楽しみを見い出して、大きな舞台で活躍をしたいと思います。

支部だより



「仲間づくりは参加から」
札幌支部 事務局長
磯島 年成
(札幌市立山鼻小学校)

「仲間づくりは参加から」

ひとつ窓辺の磨き合い

固い絆で助け合う

この言葉は、札幌青陵会を標榜した先輩達から受け継がれてきた言葉です。この言葉から同窓会創設の当時の方々の同窓としての人と人とのつながりを大切にすることや岩教大への愛校心、様々な事業に前向きに取り組む姿勢、情熱が伝わってきます。

現在の私たちの取り巻く環境は、教職員多忙化や若年層の組織離れが進み、同窓会の在り方を再考することが求められるようになってきました。このような現状から道青陵会では、「在り方検討委員会」を立ち上げ、今後、検討する機会を設けていくことを伺いました。札幌支部においても三年程前より「札幌青陵会 今と未来を語る会」として将来を見据えた組織等の見直しを図ってきているところです。

「札幌青陵会

今と未来を語る会」での検討

札幌青陵会の会員名簿を見ると、平成二

十一年より会員が激減していて、同窓会の事業・運営の今後について考える新たな場が必要とされてきました。そのような時に誕生したのが「札幌青陵会 今と未来を語る会」です。役員や主任等が集まって検討を重ねてきました。

現在、「①会費納入率アップ、②研修会への参加、③懇親会の参加、④今後の取組について」の四点で検討を重ねてきています。

会費については、周知できるような伝え方と共に振り込み方法等の集め方の工夫についても話題に挙がってきています。研究会・懇親会については、会の参加対象を考えながらも二ーズにあった内容を工夫しているところです。特に、今年度より、札幌青陵会の基盤となる各地区の活動の充実を目指し、活動の始めとして七月に全市一斉地区懇親会を計画しました。懇親会を通して地区の先生方の顔合わせと今年度の活動を互いに理解し合う等がねらいです。

また、札幌青陵会では、組織するいくつかの会があります。管理職等の「北こぶしの会」、女性の「秋桜(こすもす)の会」、中学校の「中学校連絡会」等です。これらの会と連携しながら年間を通じた活動の計画をし、其々の事業を進めています。各組織で深まりある研修を、そして、札幌青陵会として各会とつながりあって拡がりをもつ

た活動を今後も続けていきたいと考えます。道青陵会の皆様には、総会や研究大会等の折に、札幌青陵会の活動の様子を今後も伝えて参ります。



「学校経営研修会」

主催：北こぶしの会

※管理職の資質向上をねらいとした研修会

「札幌青陵会」の主な活動

- 五月 ○定期総会・懇親会
- 六月 ○中学校連絡会研修会
- 七月 ○全市一斉懇親会
- 学校経営研修会
- 八月 ○二地区合同実務研修会
- 九月 ○学校運営研修会
- 秋桜の会
- 十月 ○OB・OG会
- 十一月 ○学校課題研修会
- 大忘年会
- 一月 ○今と未来を語る会
- 勇退者と語る会

編集後記

◇会報一〇二号をお届けいたします。

本号の発刊にあたり、ご多用のところ玉稿をお送りくださった皆様にご心よりお礼を申し上げます。

《広報・情報発信担当》

- 部長 松田 一直
- 副部長 江幡 佳代
- 部員 一ノ瀬健太郎 沢 泰宏
- 小野寺英樹

北海道青陵会ホームページ

<http://www.seiryokai.net>

facebook

<https://www.facebook.com.douseiryo/>

会員の皆さんの情報をお待ちしています。